

研究者は勿論、一般人にとっても、この時代におけるミルンはじめモースやシーボルト等の人類学的・考古学的業績を探索するにあたり良い手引書となるであろう。項目ごとに引用文献が明記してあることは有難い配慮である。また第二部に原著の翻訳が載せられていることは本書の価値を一層引き立てるものである。

本書は斯学の入門書としては勿論、一般教養書としても広くお奨めしたい好著である。

(戸出 一郎)

〔雄山閣出版、東京都千代田区富士見二一六一九、電話〇三三三二六二一三三二、一九九三年、B 6判・二五六頁・定価二八〇〇円〕

堀内 冷著『兵庫医史散歩』

著者は婦人科専門医であり、現在も臨床にたずさわっておられるが、本学会会員、関西支部会員としても古い。特に「七福神の戎っさん」に関するあらゆる品々のコレクターとして、わが国で最も数多くの史料を私蔵される人物である。年頭には西宮市白鹿記念酒造博物館において私蔵の特別展示が毎年公開されている。医史学関西支部、医学切手友の会関西支部会員達も新年恒例として、きき酒、かす汁の接待につられ、毎年多くの参加者を見る。平成六年の特別展は「吉祥・福の神」と題し、戎の他に「宝船に関する」ものの初公開が注目

されている。本書の文中には単にコレクターとしてでなく著者の該博な知識を生じ西宮の郷土史にあたる「戎さん」の代名詞西宮神社由来をはじめ、民間医療信仰について記しさらに屠蘇の由来等、民俗学の領域まで詳細に記している。

本書は兵庫県下の医史につき著者自身が30年間の長きにわたって集めた資料の中から、平成元年八月号『兵庫県医師会報』より35回にわたり連載されたものをまとめて刊行された。従って医史学に関心と親しみを持つ者に、医神、儒医、系脉、寿命、皮下注射等の歴史を各タイトル毎に簡潔にして明瞭に説明している。

著者としては更に詳細な記述を望まれたであろうが、連載物と本書のページ数からしてやむ得なかつたと推察する。さらに兵庫県下の疾病史から赤十字社、兵庫県医会、医師会の諸史料について地方新聞郷土雑誌より多くの資料を掘りおこし詳細に記している。特に県下の著名な医人のプロフィールについては、著者の尼崎藩医を祖とする堀内静一を始め、岡白駒、田中信謹、原老柳、川本幸民、深山玄碩、飯田稔隠、鶴崎平三郎、深山杲、につき記述、さらに神戸に立寄ったコッホ、野口英世の県下での詳細な追跡調査も載せている。書評の筆者は特に眼科史に関心を持つ者であり眼科の項目、さらにこの文中、谷川良三及び兵庫県出身の河本重次郎、次いで京の医師新宮涼庭に関連した、原老柳、京都府下の門下生を多く擁した川本幸民の各プロフィールの項については特に関心をいだかされた。県医師会史、県医人史をはじめ民俗学

を包括した民間医療信仰についてはすでに各県別に多く出版されているが、兵庫県からのこれ等出版物はそれほど多くない。このような視点からも郷土史資料として価値を認め、かつ今後の研究に参考となり得る。また神戸病院の明治初期の写真や前述した人物像、その他数十点の資料を写真とし最後の項に、明治以前の兵庫出身の医師一覧表を載せ、今後の兵庫県医学人物史調査に恰好の資料を提供している。

著者は西宮史談会にも属され、西宮郷土史についても造形深く、多くの郷土史資料を参考にして記述されていることより特に関西在住の医史学、郷土史民俗学に関心ある者の必読の書である。

(奥沢 康正)

〔兵庫県医師会・神戸市中央区山手通り六一―三〇、電話〇七八―三七一一四―一四、四六判二九三頁、三五〇〇円〕

フォオス美弥子編訳『幕末出島未公開文書』

―ドンケルIIクルチウス覚え書―

一世紀半が過ぎてしまった今日に到っては、いささか皮肉な感じもするが、アメリカが初めて日本に関心を寄せたのは、当時急激に増加していた自国の捕鯨船団の保護が目的だった。日本近海で船が難破した際、乗組員が監禁され、長崎からの移送はオランダに委ねられていたためである。さらにはまた蒸気船の運行が発達し、東アジアでの補給基地を確保する必要も増大していた。日本を如何に国際社会へ編入でき

るかには西洋諸国にとつて緊急の課題となった。一八五二年浦賀沖へのペリー提督来航は、同様の「訪問」をする他の船の先駆けになっただけではない。それは徳川体制の崩壊状態を決定的なものとして、将来の対外関係をめぐる国中の激しい綱引きに少なからぬ影響を及ぼした。

米英露仏等列強の圧力の下で陥っていた分裂状態を生々しい描写によつて裏付けたのは最後の出島商館長ヤン・ヘンドリック・ドンケルIIクルチウス [Jan Hendrik Donker Curtius, 一八一三―一八七九年] であつた。彼は西洋で唯一、それまで二世紀余りに互つて鎖国日本と直接交渉を維持してきた国の代表者として、アメリカなどが頼りがちであつた砲艦政策よりも、ねばり強く双方の信頼関係を築く方が遙かに適切であると判断していた。そのために、彼は積極的にオランダ語の普及を促進し、西洋の学問、技術の導入を助成し、様々な啓蒙活動を行なつた。同時にまたドンケルIIクルチウスが同時に日本の理解に努めていたことは、「日本文法稿本」(Droevenener Japansche spraakunst) という形で結実した彼の日本語研究からもうかがわれる。およそ七年に及ぶ日本滞在で蒐集した数多くの書籍は現在主としてライデン大学に所蔵されている。

この度出版された本で紹介されている記事は編著者のフォオス美弥子氏が植民省極秘文書の中から発見したものである。本の前書き(七頁)ではまず歴史的背景や資料について述べられ、続く本文は一八五二年(嘉永五年)の書簡及び一八五三年